

L. 消化器 (肝・胆道)

-191- 核医学的検査法による肝胆道疾患診断の臨床的評価

金大 核

○油野民雄, 二谷立介, 利波紀久,
久田欣一

(目的) 肝胆道疾患検索のため肝胆道シンチグラフィを施行し約350例に及ぶが、今回明確な確定診断のされた180例のシンチグラム所見の結果より、その臨床的有用性につき検討を試みた。

(方法と結果) ^{131}I -ローズベンガルまたは ^{131}I -BSP 100 μCi 静注後、10分、30分、60分、120分、240分、24時間像(必要に応じて48時間、72時間像追加)をシンチカメラにて撮像し、得られた所見のうち、心ブール像、腸管への排泄、肝門部欠損の有無につき各疾患毎に黄疸の程度に応じて観察した。黄疸陰性75例では腸管への排泄遅延のみが異常所見であり胆道系疾患34例中15例で呈した。軽度黄疸群では、心ブール像を呈した5例中4例が肝細胞性疾患(9例中4例)であり、腸管への排泄遅延所見を呈した12例中8例が胆道系疾患(10例中8例)であった。中等度黄疸群では、肝細胞性疾患11例中9例、胆道系疾患10例中6例で心ブール像を呈した。腸管への排泄に関しては肝細胞性疾患6例全例、肝内胆汁うつ滞症3例全例排泄遅延所見を示し、胆道系疾患では6例で排泄遅延、残り4例で完全閉塞所見であった。高度黄疸群では肝細胞性疾患2例、肝内胆汁うつ滞症8例中5例で24時間像で腸管へのRI排泄を認めたが、胆道系疾患28例全例では完全閉塞所見を呈した。また肝内胆管拡張を示唆する肝門部欠損は胆道系疾患で黄疸陰性6%、軽度30%、中等度40%、高度47%と黄疸が高度になるにつれ増大傾向を認めた。次に、肝細胞のRI摂取状態をより正確に把握するためRI静注5分後に対する20分後の停滞率比を算出しかつシンチグラム所見の双方より肝胆道疾患を評価した結果、完全閉塞所見を呈する場合肝門部の欠損または80%以下の停滞率比を示せば肝外閉塞性黄疸との結果が得られたが、停滞率比が80%以上では肝内胆汁うつ滞症か肝外閉塞性黄疸かの鑑別困難であった。また腸管への排泄遅延例では血中停滞率比が70%以上なら内科的黄疸、40%以下なら肝外胆道系疾患の可能性が、排泄正常で血中停滞率比が40%以上なら肝細胞性疾患の可能性大なる結果が得られた。

(結論) 肝胆道系疾患診断法としての核医学的検査法は内科的肝細胞性疾患または肝内胆汁うつ滞症か、外科的肝外胆道系疾患かの鑑別に有効と思われるが、両疾患の鑑別が困難な場合も少なくなく今後より詳細な検討が必要かと思われる。

-192- 胆道疾患に対するR.I.診断の臨床的意義について

国立東二

○石山和夫, 与那原良夫
国立横浜南
倉光一郎

胆道系の疾患に対するR.I.診断は、肝との関連において病変の状態を知り、手術を含めての治療手段を選択する際の情報を得ることができる。

方法： ^{131}I -Rose Bengal 又は ^{131}I -BSPを静注後のシンチグラムを求めると又は連続的にカウントを記録する。更に一定時間後の血中R.I.停滞率を求めて肝の排泄能の示標が得られる。即ち、

- 1) 肝、胆道領域の経時的な描記から胆汁の分布、通過状態が観察できる。
- 2) シンチカメラにより連続的に描記し、胆汁分泌の動態が解明出来る。
- 3) 得られた描記の状態は、胆嚢造影を行う際の造影の可能性を予測出来る。
- 4) 動態機能観察装置を使用し、R.I.のカウントを連続的に記録することにより、肝への摂取、排泄能と胆嚢の収縮状態を時間の因子を含めて定量的に求められる。
- 5) R.I.投与後一定時間後に採血し、そのカウントを測定することにより肝の排泄能を知ることが出来る。

臨床成績：我々は過去10年間の手術例についてR.I.による検討を行い、他の検査成績および手術所見との関連についての比較検討を試みた。

シンチグラムで胆嚢が描出された胆石症84例中56例では、DICによりその88.6%が造影可能で、胆管陰影では92.5%が陽性であった。シンチグラム、造影共に陰性のものはすべて胆汁の通過障害を示す病変を認めた。又200秒間隔で連続して描記した他の51例では43例に描出可能であったが、50分以上において描記されたものは著明な病変を示していた。黄疸例では肝・胆道系の描記は不良であった。動態機能検査装置による肝へのR.I.摂取、排泄状態では、正常値を示したものの70%以上はレ線の胆のう造影が可能で、これらはすべて病変の程度が軽度の傾向にあった。これら諸検査に加えてR.I.静注後10分と30分において採血し、血中停滞率をみた50例では、他の血液化学検査と平行した成績を示していた。

結論：1) R.I.による胆道系病変の観察は、肝との関連において、形態的、機能的な面から多くの情報が得られる。2) 時間的因子を加味して観察できることは、胆汁の分泌状態を知る上において重要である。3) レ線造影、血液化学的検査と一致した成績が得られることは、患者に対する苦痛も少く、副症状の殆どない本検査法は、胆道系疾患の診断の際に最初に行うべき価値がある。